

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25年 6月 10日現在

機関番号：35408

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530732

研究課題名（和文）

専門家が用いるジェンダーセンシティブコミュニケーションに関する臨床心理学的研究

研究課題名（英文）

Research of Clinical Psychology about Gender-sensitive Communication for Experts

研究代表者

奥野 雅子 (OKUNO MASAKO)

安田女子大学・心理学部・准教授

研究者番号：60565422

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は主に二つにまとめられる。一つ目は、臨床心理士を対象にしたインタビュー調査より、心理臨床家が現在直面している性差やジェンダーをめぐる問題を明確にし、その問題解決について協働関係の構築と面接構造の側面から提案した。二つ目は、大学生を対象にした質問紙調査より、非専門家の立場から専門家が用いる有効なコミュニケーションについて、専門家とクライアントの性、及びクライアントのジェンダーによって、コミュニケーション効果が異なることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The results of this study constructed two aspects. One was induced by interview researches with clinical psychologists. It clarified the problems that clinicians were faced with about sex difference and gender, and produced solutions from building of the collaborative relationship and interview structures. The second was introduced by questionnaires toward university students. It suggested how experts communicated with clients effectively, and also implied that effective communication was changed by sex of both experts and clients and clients' gender.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：コミュニケーション、専門家、ジェンダー、性差、心理臨床面接

1. 研究開始当初の背景

(1) 生物学的な性に対し、文化・社会・心理的な性のあり方はジェンダーと呼ばれる。双方に配慮した性差医療（ジェンダー・センシティブ・メディスン）は、アメリカを中心に始まり、日本にも導入された。性差医療では、女性専門外来が開設され、同性の専門家が対応することで配慮を行った。

(2) しかし、同性の専門家による対応の効果は疑問視されはじめ、また実証されているわけではない。また、現在のジェンダーセンシティブメディスンには、専門家が性差をどのように捉えて表現するかという、ジェンダーに関するコミュニケーションの視点が不足している。

(3)ジェンダーをコミュニケーションの側面から捉えようとする試みは、システム理論を基盤とするコミュニケーションの語用論の視点を援用し、ジェンダーの可変性、相互作用性、現在性に着目している。

2. 研究の目的

近年、心理療法や医療などの臨床場面で、専門家が患者やクライアントを支援する際に、性差やジェンダーの影響を考慮せずに解決を図ることは難しいことが指摘されている。しかし、専門家と患者の間の性差やジェンダーがどのように影響し、専門家はどうか対応すべきかについての研究は少ない。本研究では、専門家がクライアントや患者を効果的に支援するために、性差やジェンダーを踏まえた対応を検討し、専門家が用いる有効なコミュニケーションに対し提言を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) インタビュー調査

5年以上臨床経験のある臨床心理士20名(男性10名、女性10名)を対象に、60~90分の半構造化面接法によるインタビューを実施した。インタビュー内容は、これまで直面した性差やジェンダーに関する問題、それに対する対応、その効果が上がった時とうまくいかなかった時について質問した。逐語化したインタビューデータをグランデッド・セオリー・アプローチの手続きに従って分析した。

(2)質問紙調査

①女子青年を対象とした性差に関するコミュニケーションについての調査

調査対象：大学生女子231名
調査時期：2010年1月から2011年12月
手続き：大学の講義中に質問紙を配布回収
質問内容：同性と異性の専門的立場の人を想起してもらい、その専門家がどのようなコミュニケーションを行えば納得するかについて、合意形成コミュニケーション尺度(奥野,2009)に回答してもらう。

②女子青年を対象にしたジェンダーに関するコミュニケーションについての調査

調査対象：大学生女子152名
調査時期：2010年1月から2011年12月
手続き：大学の講義中に質問紙を配布回収
質問内容：同性と異性の専門的立場の人を想起してもらい、その専門家がどのようなコミュニケーションを行えば納得するかについて、合意形成コミュニケーション尺度(奥野,2009)に回答してもらう。また、女性性・男性性を測定する尺度として、F-H-Mスケール(伊藤,1978)に回答してもらう。

③男子青年を対象にした性差とジェンダーに関するコミュニケーションについての調査

調査対象：大学生男子102名
調査時期：2012年2月から2013年1月
手続き：大学の講義中に質問紙を配布回収
質問内容：同性と異性の専門的立場の人を想起してもらい、その専門家がどのようなコミュニケーションを行えば納得するかについて、合意形成コミュニケーション尺度(奥野,2009)に回答してもらう。また、女性性・男性性を測定する尺度として、F-H-Mスケール(伊藤,1978)に回答してもらう。

4. 研究成果

(1)心理臨床面接における性差やジェンダーの問題と解決に関する研究

20名のインタビューデータをグランデッド・セオリー・アプローチによって分析した結果、臨床心理士が面接のなかで直面する性差やジェンダーに関する問題とその解決について、以下のようなカテゴリーと概念が生成された。《 》で囲まれた用語はカテゴリーの名称、【 】で囲まれた用語は概念の名称であることを意味する。

① 性差やジェンダーに関して直面する問題について

まず、問題には5つの概念があり、さらに2つの大きなカテゴリーが生成された。第1番目に《セラピューティックな関係の形成と維持に関する問題》が挙げられる。その中では、【ラポール形成の困難】があり、男性Thは女性Clが自分に対して恐怖感を抱くのではないかという不安、女性Thは男性Clに対する恐怖感が存在する。面接プロセスが進む中で、ThとClが同性の場合、【ライバル的關係】が芽生えること、逆に異性の場合【転移感情の扱い方】に関する問題が生じる。

第2番目に、《女性・男性特有のトピックを扱う問題》が挙げられる。その中では、ThとClが異性の場合、性虐待や性癖などの【性に関するトピック】を扱う困難さがある。また、男性Thにとって、Clの話がファッションやファンタジー、あるいは人間関係の問題など【女性特有のトピック】である場合、理解の難しさが語られた。

② 性差やジェンダーに関する問題解決について

解決についても、5つの概念があり、さらに2つのカテゴリーが生成された。まず、ClとThの関係性に関する問題に対する解決は、どのようにジェンダーに配慮して《協働関係の構築》ができるかに左右される。心理臨床面接自体、受容と共感を基本とする女性性の

高いコミュニケーションといえるが、【男性的なコミュニケーション】をどう表出するかで面接の効果をより上げることができる。たとえば、Clの語りにタイミングよくThが割り込み、質問をさしはさむことで面接の舵取りを行い、聞きたい情報を得ることもこれにあたる。また、臨床心理士が拠って立つ心理療法に従い、Clが男性、女性に関わらず、主訴とゴール設定などを【ニュートラルな立場】で行っていく。面接プロセスにおけるClとThのコミュニケーションの相互作用のなかでThは【ThとClの距離感の調整】を続けることが必要になる。

女性・男性特有のトピックを扱う面では、《面接構造》が重要になる。まず、Clに対して最初に【面接構造の提示】を行い、合意を得るかリファードするかを決める必要がある。面接を進めるなかで困難な点が発生すれば【面接構造の変化】を提案し、Th自身が後方支援にまわることも可能である。

(2) 専門家の性差がコミュニケーションに与える影響

非専門家の立場から、同性・異性の専門家によるコミュニケーションの差異に着目し、性差とコミュニケーションの関連性について検討した。なお、コミュニケーション尺度として、合意形成コミュニケーション尺度を用いた。この尺度は“会話内容”と“会話マネジメント”から構成され、前者には「論拠」「恐怖喚起」「両面呈示」「因果関係」、後者には「身振り」「和やかさ」「真剣」「同意確認」「相槌」「静止」「言切り」の下位尺度がある。

① 女子青年を対象とした調査

合意形成コミュニケーション尺度の下位尺度の合計得点について、異性と同性の専門家の間で対応のあるt検定によって比較した。さらに、同性、異性のそれぞれの専門家において、会話内容と会話マネジメントの2領域に分けて、コミュニケーション因子の合計得点を項目数で除した平均値を一元配置の分散分析によって比較した。

その結果、同性より異性の専門家が会話内容に「恐怖喚起」を多く使い、会話マネジメントでは「真剣」「言切り」を多く用いるほうがコミュニケーション効果を向上させることが示された。また、異性より同性の専門家が「身振り」「和やかさ」「あいづち」を多く用いるほうが効果的であった。

一方、会話内容因子間の比較では、同性・異性の専門家は共に「恐怖喚起」を他の因子より少なく用いるほうがコミュニケーション効果が上がることを示唆された。会話マネジメント因子間の比較では、同性の専門家が「相槌」、次いで「同意確認」を他の因

子より多く使い、異性の専門家は「相槌」と「真剣」を他の因子より多く用いることが高家的であると示唆された。

以上の結果を総合すると、女子青年に対し女性の専門家は対人距離を近くして和やかにリラックスした雰囲気で行うことが効果的であり、逆に男性の専門家は対人距離をやや遠くして真剣でやや緊張した雰囲気で行うほうが有効であると考えられる。

② 男子青年を対象とした場合

女子青年を対象にした場合と同様の方法によって分析を行った。

同性より異性の専門家が会話内容に「恐怖喚起」を使い、会話マネジメントでは「和やか」な様子で「同意確認」を多く用いること、また、異性より同性の専門家が「真剣」な雰囲気で行うことがコミュニケーション効果を向上させることが示唆された。

一方、会話内容因子間の比較では、同性・異性の専門家は共に「恐怖喚起」を他の因子より少なく用いるほうが効果的であることが示唆され、会話マネジメント因子間の比較では、同性の専門家が「相槌」と「真剣」を他の因子より多く使い、異性の専門家は「相槌」と「真剣」に加え「同意確認」と「和やか」を多く用いることが効果的であることが示唆された。

以上の結果を総合すると、男子青年に対し女性・男性の専門家共に相手の話を真剣に聴くという態度が有効であり、さらに女性の専門家の場合は、和やかに同意確認をしながら話を進めることが効果的であることが考えられる。また、専門家が男性より女性である場合に会話内容より会話マネジメントにより配慮することが必要であると考えられる。

(3) 非専門家のジェンダーが専門家のコミュニケーションに与える影響

非専門家の性差ではなく、ジェンダー、つまり、男性性、女性性によって、専門家が用いるコミュニケーションに与える影響を、専門家が同性、異性のそれぞれの場合について検討した。

① 女子青年を対象にした場合

合意形成コミュニケーション尺度の下位尺度の合計得点について、女性性（高／低）×男性性（高／低）の2要因の分散分析を行った。

その結果、女子青年を対象にして専門家が用いるコミュニケーションでは、ジェンダーに関する価値観や専門家が同性、異性によってその効果が影響されることが示唆された。まず、同性の専門家の場合、コミュニケーション

ョンの会話内容では、「恐怖喚起」を使用することが女性性の高い女子青年に対し有効であり、会話マネジメントでは、「相槌」を用いることが男性性の高い女子青年に有効であることが示唆された。「同意確認」の使用と「真剣」な雰囲気は男性性、女性性の両方が高い場合に効果があることが示された。

一方、異性の専門家の場合、コミュニケーションの会話内容では、「因果関係」を用いて話すことが男性性の高い女子青年に効果が上がる可能性があり、会話マネジメントでは、「和やか」な雰囲気が女性性の高い女子青年に、「真剣」な雰囲気や体を「静止」させて会話を行うことが男性性の高い女子青年に有効であることが示唆された。

以上の結果を総合すると、女性の専門家が女性性の高い女子青年に対する効果的なコミュニケーションとして、対人位置を高く、あるいは和やかに関わる、という2側面がある。また、男性性の高い女子青年の場合は、女性の専門家は受動的関わりが効果的であると考えられる。一方、男性の専門家は女性性の高い女子青年に和やかに関わること、男性性が高い場合は論理的でやや緊張した雰囲気に関わることが効果的であると考えられる。

② 男子青年を対象にした場合

女子青年を対象にした場合と同様の方法によって分析を行った。

その結果、男子青年を対象に専門家が用いるコミュニケーションでも、ジェンダーに関する価値観や専門家が同性、異性によってその効果が影響されることが示唆された。まず、同性の専門家の場合、コミュニケーションの会話内容では、「両面呈示」を使用することが男性性の高い男子青年に対し効果が上がる可能性があり、会話マネジメントでは、「和やか」かつ「真剣」な雰囲気です話し、「言切り」表現を用いることが女性性の高い男子青年に効果が上がる可能性があることが示唆された。

一方、異性の専門家の場合、コミュニケーションの会話内容では、「恐怖喚起」を用いて話すことが女性性の高い男子青年に有効であり、「両面呈示」を用いることが男性性の高い男子青年に効果が上がる可能性があり、会話マネジメントでは、「真剣」な雰囲気です体を「静止」させ、「相槌」を打つことが女性性の高い男子青年に有効であることが示唆された。

以上の結果を総合すると、男性の専門家が男性性の高い男子青年に対する効果的なコミュニケーションは、会話内容における論旨を両側面から述べる事であるが、女性性の高い男子青年に対しては、和やかな雰囲気とや

や対人距離を離すという2側面が存在する。一方、女性の専門家は男性性の高い男子青年には会話内容における論旨を両側面から述べる事であるが、女性性の高い男子青年に対しては、対人位置を高く、あるいは受動的に関わるという2側面が存在する。

非専門家が女子及び男子青年のどちらであつても、ジェンダーと性が反対方向である場合には、専門家が用いる効果的なコミュニケーションが一義的とはならない。専門家のC1に対する関わりが、相補的あるいは相称的のいずれかになることで効果が上がる可能性が考えられる。

(4)性差とジェンダーの両側面が専門家のコミュニケーションに与える影響

これまで、専門家との性差、C1の性とジェンダーが専門家のコミュニケーションに与える影響について検討してきたが、ここでは性とジェンダーの相互影響も含め、専門家のコミュニケーション効果に与える影響を検討した。大学生230名(女性152名、男性78名)のデータを、合意形成コミュニケーション尺度の下位尺度の合計得点について、性(男/女)×女性性(高/低)×男性性(高/低)の3要因の分散分析を行った。

その結果、専門家が臨床場面でC1とコミュニケーションを行う場合、専門家とC1の性差、C1の性とジェンダーによってコミュニケーション効果が異なることが示唆された。また、その影響は会話内容よりも会話マネジメントに多く表出することが示された。

まず、会話内容における効果では、専門家が同性・異性であるか、C1が男性・女性であるかはほとんど影響を及ぼさず、C1のジェンダーのみが影響を与えた。そのジェンダーの要因の影響では、男性性の高いC1に「論拠数」を多く、「両面呈示」を用いること、女性性の高いC1に「恐怖喚起」を用いることが効果的であることが示唆された。

一方、会話マネジメントにおける効果では、専門家が同性・異性か、C1が男性・女性か、C1の男性性・女性性の高低によって様々な影響を受けることが示唆された。まず、「同意確認」をすることは専門家とC1が共に女性の場合に効果を上げる。「真剣」な雰囲気です話しことは、同性の専門家でC1が男性の場合及び男性性が高い場合に有効であり、異性の専門家では、男性性が高い場合と女性性が低い男性に効果が上がることを示唆された。「相槌」をうつことは、専門家とC1が共に女性の場合に有効であり、専門家が異性の場合には、女性性の低い女性及び女性性の高い男性に効果的であることが示唆された。体を動かさずに「静止」して話すことは、専門家とC1が共に男性の場合に有効であり、異

性の専門家では、女性性が低い女性、女性性が高い男性に効果的であることが示唆された。また、専門家が同性でも異性でも同じ効果を上げるコミュニケーションは、C1の女性性が高い場合に、専門家は「身振り」を用いて「和やか」に話すことが有効であることが示された。

本研究では、C1として青年男女を想定しているが、専門家にとってC1が同性より異性の場合のほうがコミュニケーション効果は性とジェンダーの両方から影響を受けて複雑になるため、異性のC1の対応にはコミュニケーションに関して柔軟性が求められることになる。つまり、コミュニケーション効果を向上させるためには、どのようにコミュニケーションするかという、会話マネジメントをその時に応じて微調整する必要がある。一方、面接の中でC1のジェンダーを把握することが容易でないこともあると考えられるが、専門家はC1との間で合意が得られにくく、コミュニケーションの悪循環が生起している場合は、C1の性とジェンダーに着目し専門家のコミュニケーションのあり方を変化させることでコミュニケーション効果を向上させる可能性の一部を、本研究は示唆したといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

(1) 奥野雅子 専門家の性差と合意形成コミュニケーションとの関連性—会話内容と会話マネジメントの両側面から—、安田女子大学紀要、査読無、41巻、2013、71-81

(2) 奥野雅子 専門家が用いるジェンダー表現—システム論的観点から—、武蔵野大学通信教育部人間学研究論集、査読無、1巻、2012、13-22

(3) 奥野雅子 合意を目的とするコミュニケーションに及ぼす空間的ジェンダーと性の影響、ヒューマン・ケア研究、査読有、12巻、82-97

(4) 奥野雅子 教育現場におけるジェンダーセンシティブ—コミュニケーションの相互作用の視点から—、安田女子大学教育総合研究所年報、査読無、6巻、47-53

[学会発表] (計5件)

①奥野雅子 薬剤師が用いるジェンダー・センシティブな支援に関する一考察—コミュニケーションの相互作用視座からの検討—、日本ファーマシューティカルコミュニ

ケーション学会第6回大会、2012年11月4日、福山大学

②奥野雅子 クライアントのジェンダーによる専門家の合意形成コミュニケーション、日本心理臨床学会第31回大会、2012年9月14日、愛知学院大学

③奥野雅子 専門家の性差による合意を得るコミュニケーションに関する研究、日本家族心理学会第29回大会、2012年7月15日、東京学芸大学

④奥野雅子 心理臨床面接における性差やジェンダーの問題と解決に関する研究—ジェンダー・センシティブ・コミュニケーションに着目して—、日本心理臨床学会第30回大会、2011年9月4日、九州大学

⑤奥野雅子 臨床現場におけるジェンダー表現再考—システム論的視点から—、日本家族心理学会第28回大会、2011年8月28日、鹿児島女子短期大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥野 雅子 (OKUNO MASAKO)
安田女子大学・心理学部・准教授
研究者番号：60565422

(2) 研究分担者

長谷川 啓三 (HASEGAWA KEIZO)
東北大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：70149476